

じゅりみち

…… 被災地支援情報 ……

第101号 発行日 2014.3.11
被災地NGO協働センター

〒652-0801 神戸市兵庫区中道通2-1-10

tel : 078-574-0701 fax : 078-574-0702

URL <http://www.pure.ne.jp/~ngo/>

e-mail ngo@pure.ne.jp

口座番号: 01180-6-68556(郵便振替)

巻頭言 あの日から3年…

東日本大震災の発生から間もなく丸3年を迎えます。道路や防潮堤などの工事はみるみる進んでいますが、被災者の暮らしは、仮設やみなし仮設、避難生活など不自由な生活が続いています。

仮設から自力再建をした人、復興住宅に入居した人もわずかですがいらっしやいます。しかし、残された人との心の隙間が広がっています。

阪神・淡路大震災での3年目あたりは以下のように神戸新聞で伝えています。

「兵庫県警の調べでは、仮設住宅での孤独死は計163人。その周辺に多くの死がある。避難所などでの関連死を追跡してきた神戸協同病院の上田耕蔵院長は『生きがいがあれば、ストレスも乗り越えられるが、仮設では“あしたもがんばって生きよう”という気持ちをなくしてしまっていることが大きい』と指摘する。『恒久住宅への転居が進めば、仮設に残る人の不安は増し、健康問題が深刻になる』と県担当者。保健婦らの巡回も限られ、効果的な対策は見いだせない。」（1997年7月16日神戸新聞）

「市街地からあまり離れていないところに帰りたい。もし住宅が当たっても、高齢で健康ではないので孤独な生活に対する不安がとても大きい。慣れない土地で、人との語らいのないさびしい生活は、こちらで嫌というほど味わっている。孤独死する人の気持ちが痛いほどよく分かる。私たちを忘れないで、県外でさびしい 思いをしている者に温かい支援を寄せてほしい。（大阪府・70以上女性）」（1997年12月20日神戸新聞）

先の見えない不安を抱えていたのは、阪神・淡路でも同じ状況でした。

私も実際に仮設を回っているとき、被災者の男性が「もう生きていてもしかたない。殺してくれ」と叫んでいました。私は声も掛けられず、ただただ呆然と立ちすくんでいました。近所の被災者の方が、その男性に「死んだってしょうがない。がんばって生きていこう」など慰めのような言葉をかけて、必至で止めていました。その日はそのままやり過ごしたのですが、数日後ビルの屋上から飛び降り自殺をしたそうです。

震災から2年、3年くらいは孤独死も増え、自殺も多く発生していました。このような事態にボランティアの人たちは、仮設を一軒一軒回り安否確

認をしていました。

東日本大震災の被災地でも昨年暮れに仮設から復興住宅に引っ越した方が、間もなく川で亡くなったという知らせを聞きました。自殺でした。せつかく終の棲家に移ってこれからだという時に、なぜ??

阪神・淡路でおきたようなことが、東日本でも繰り返されていて、憤りを感じずにはいられませんか。

3年を迎える被災地では、表面的には見えにくい課題が多くなり、関連死を引き起こすようなきっかけがあちらこちらにあるのです。仮設から復興住宅など新しい引っ越し先でも、またあらたにコミュニティを作り直さなければならないのです。ある被災者が「これから何回コミュニティを作り直すのだろう」とつぶやいていました。また19年前のKOBEと同じ言葉を耳にし、ほんとにやりきれない思いです。

一方で今回の東日本大震災では、原発という過酷事故を引き起こし、大きな課題を与えられています。「原発事故で地域と暮らしを引き裂かれた福島と、核のごみのリサイクルを受け入れる青森県六ヶ所村。2枚の地図を重ね合わせて映し出す記録映画「福島 六ヶ所 未来への伝言」（島田恵監督）が公開された。（中略）郡山市で自然農法の米作りを営む中村和夫さんは、14代続いた農家。精密検査でごく微量の放射性セシウムが検出され、大量の在庫を抱えている。『東京のために福島の人、電気をつくってきたんだから、今度は福島の人言うこと聞いて。原発事故、あれは絶対あつてはなんねえ』と声を振り絞る。島田監督は『未来を生きる世代に、私たちはこんな事故を引き起こしてしまったけれど、新しいあなたたちのことを思って、新しい未来をつくろうと、悩み、苦しみながら、一生懸命がんばったんだよ、と伝言したい』と決意を込める。」（2014年2月17日東京新聞）

被災地の復興はまだまだはじまったばかりです。（増島智子）

ACTION

福島のことを 一緒に考えてみませんか？

今年の1月に行われた「加川広重巨大絵画が繋ぐ東北と神戸2014」の中で、「3.11から1.17へ～若者たちが語り合う震災と未来～」というイベントが開かれました。このイベントは若者が中心になって、巨大絵画の前で東北支援の現状と課題を話し合うという内容でした。私たち被災地NGO協働センターでは、4つのテーマのうちの1つ、「福島原発と私」というテーブルを受け持ち、若者と一緒に原発の問題について考えるワークショップを行いました。

この中で出てきた意見は、原発が身近に感じられない、ということでした。学生の中には原発について知るための勉強会を開く活動をしているような学生や節電に取り組んでいるという学生もいましたが、普段の生活の中でなかなか考える機会がなかったり、あるいは、原発という難しい専門知識があるというイメージで敬遠してしまうという意見もありました。

当センターでは、3.11後からフクシマについて学ぶ寺子屋勉強会を継続してまいりました。原発事故により、避難者は故郷を奪われたまま、もう福島には帰らないという選択をする方が多くなってきています。富岡町役場の方のお話によると、10月の町民アンケートの結果、町に帰りたいたいという希望をしておられる方はわずか12%だとおっしゃっていました。帰りたくないから帰らないというよりも、帰ることが出来ないから帰れないという側面が大きな理由になっているようです。それを裏付

けるように、最終処分場を福島へ建設し、原発の核廃棄物を福島に集約しようという提案も一部ではなされています。一方で、国・県は帰還政策を中心に進めており、「原発事故子ども・被災者支援法」も効果的な法律とはなっていません。こうした背景も考えると、避難者の支援はより一層必要となってくるのではないかと思います。

東京都知事選では、脱原発を掲げる候補者が注目されました。少しずつではありますが、脱原発に向けた道筋が見えてきているような気がします。若者の間でも少しずつ、こうした問題に目を向け、積極的に考える場が出来てきていることも感じます。しかし、まだまだ若者が主役になっているとは言えないというのが現実です。

東北の被災地のことや原発・エネルギーのことは次世代を担う大学生などの若者やさらにその次の世代が、まさに直面していく問題であることは間違いありません。それは、福島県相馬市の小学校6年生の「復興は、これから20～30年にかかることだと思います。それは、私たちの人生そのものでもあります」という言葉にも表れています。いまこそ、若者が中心となってこうした問題に対して取り組み、新たな価値観を生み出していかなければならないのではないのでしょうか。（頼政良太）

※寺子屋勉強会は、来年度も継続しますので関心のある方はご一報ください。



福島交通・飯坂線の福島駅

シリーズ

阪神・淡路大震災からの経験を凝縮

減災サイクル

前号から引き続き、代表・村井雅清の19年間の集大成である減災サイクルについての特集をお届けします。

東日本大震災では、障がい者の死亡率が2倍と言う悲惨な結果になって、これも阪神・淡路大震災後の教訓が生きていないんですね。阪神・淡路大震災の時にも同じように障がい者の人は亡くなっていて、「なんでやねん！」ということを当時から発信しているんですが、なぜか通じていないんです。



障がい者が生きるためには、一般の人に比べてより他者の助けを求めなければならないでしょう。例えば、行政や専門家などの協力は不可欠ですね。自分でどうしたらいいかと考えても自力では危機から脱出できないケースが多いのです。そういった状態でした

が、2006年にゆめ風基金さんが『障害者市民防災提言集』を作ったときから変わってきて、積極的に全国に発信を始めました。これは東日本大震災版ではなく、阪神・淡路大震災を受けての教訓です。（現在は東日本大震災版も発行されています）本当はその提言集をもとに障がい者当事者たちと支援者たちが、**もっともっと徹底して協議していれば、被害は止められたかもしれません**。前提として“たら・れば”の話になってしまいますが、減災サイクルに従ってもっともっと徹底してシュミレーションなどを経験していれば、明らかに被害は減ったと言えるでしょう。

もう一つは、東日本大震災から2年を過ぎた頃、（福島県での）**関連死が直接死を超えてしまった**という事態ですね。阪神・淡路大震災時には、関連死はそれほど多くなかった。（注）今回ははるかにそれを超え、（福島県では）直接死を超えるという事態になってしまいました。これは驚く

べき事実で、**なぜ止められなかったのか**。関連死は、避難所の劣悪な環境も影響し、ストレスがさらに体調を悪化させて亡くなっていくという定義なんです。ストレスの軽減というのは、阪神・淡路大震災の時からある程度はチャレンジをしてきているので、**一定の手法はあっただろうし、ノウハウも蓄積されていると思います。しかし、それが生かされていないということが言えるわけですよ**ね。

こうした犠牲を無くすにはどうしたらよいのかという**対策を考え、被害を減らし、最終的にはゼロにするというのが減災サイクル**なのです。（聞き手・編集 頼政良太）

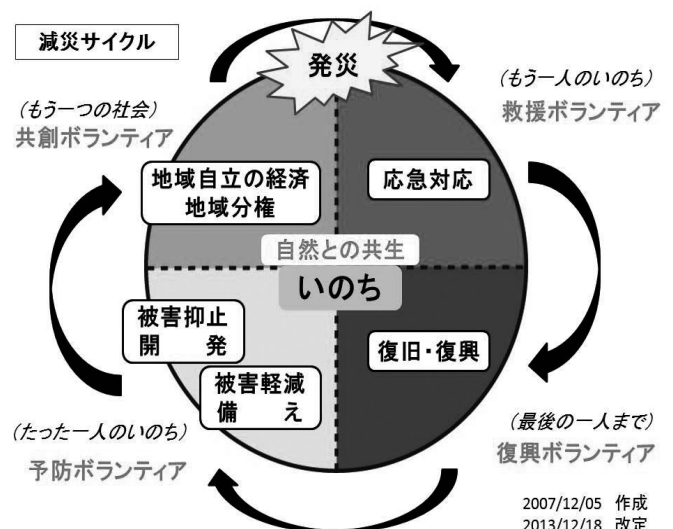
（注）

阪神・淡路大震災の関連死

919名／平成17年12月兵庫県発表

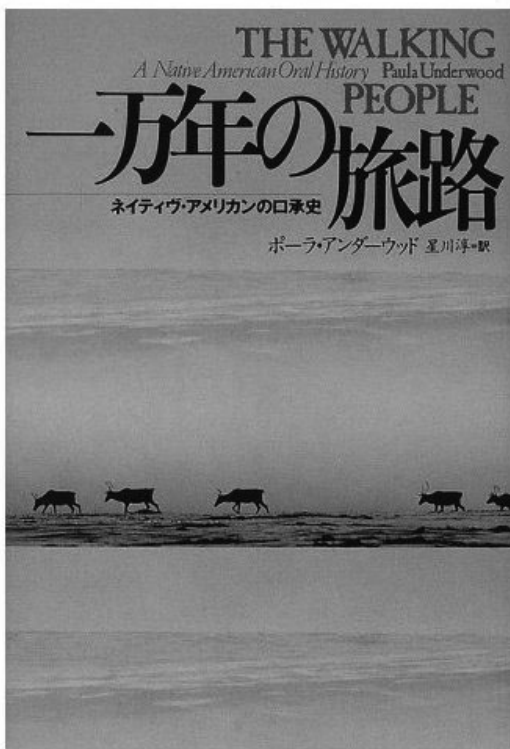
東日本大震災の関連死

2,916名／平成25年12月復興庁発表

福島県：直接死 1,603名 関連死 1,652名
／平成26年2月福島県発表2007/12/05 作成
2013/12/18 改定

2015市民・NGOフォーラム 阪神・淡路大震災20年の検証

東日本大震災から丸3年になるが、被災地にはまだまだ課題が多く残っている。復興住宅の建設や高台移転などが進む一方で、その計画には住民の意見がしっかりと反映されているわけではない。沿岸部に建設される防潮堤も住民との十分な話し合いの場がないままに建設が始まり、地域の宝である砂浜が消えてしまう場所もある。ボランティアがどんどん減っていることで、外部の人との関わりも少なくなり交流人口も減ってきている中で、どのように地域を盛り上げていくかが課題となっている。



阪神・淡路大震災の3年目も同じような課題を抱えていた。教訓が活かされてうまく改善されている部分もあるかもしれないが、今の東北の現状を見ると、あまりにも阪神・淡路大震災の経験が活かされていないのではないかと感じる。東日本大震災と阪神・淡路大震災は状況

たって、なぜ伝わらないのか、伝え方が悪いのか、どうすれば伝わるのか、といった部分も含めて阪神・淡路大震災20年の検証のための議論をしてきた。

阪神・淡路大震災から発信してきたことは、実は一方的だったのかもしれない。あるいは、提言としてまとめることで満足してしまっていて、十分に発信できていなかったのかもしれない。この2015市民・NGOフォーラムでは、従来のやり方にこだわらない伝え方も模索をしている。そのためには、多様な価値観をそれぞれが認め合う包摂性（インクルーシブ）が大切であり、伝えられるべき相手である次世代としっかりと向き合わなければならない。

一人ひとりが、これまでのミーティングで出てきたキーワード「居場所・個の尊重・若者が進路を選択できる社会・障がい者が当たり前地域に暮らす」について、身近な生活の中でどう捉えているのかを検証していきたいと思っている。そうすることで、言葉だけの理解ではない形が見えるのではないかな。

結局は発信しても当事者になってみないとわからないということなのだろうか。しかし、当事者の感覚はわからないかもしれないが、少しでも近づけるように努力することは出来る。それはノンフィクション作家の柳田邦男さんのいう「2.5人称」ということに通じているだろう。このキーワードをより具体的に理解し伝えることを目指し今後も議論を続けていきたい。（頼政良太）

▲じゃりみち99号で紹介したアメリカインディアン・イロコイ族について書いてある本

が違うと言えどそれまでだが、東北の支援に関わりながらもっと伝えられていれば防げることもあったのではないかな、と痛感してきた。そうした思いから、この2015市民・NGOフォーラムを準備するにあ

20th
1995-2015



「じゃりみち」を歩む

ひとりとして

元スタッフ 鈴木隆太

震災から19年を迎えたこの年に、じゃりみちの発行から100号を発行されたこと、あらためてこれまでこのじゃりみちに係わってこられた方々お一人おひとりに、謝辞を送りたいと思います。また、こうして100号まで発行できるまで、支えてくださった方々お一人おひとりに感謝を申し上げたいと思います。

振り返れば、震災後に仮設住宅が建設され、その仮設団地内の舗装されていないじゃりみちになぞらえて復興の道のりを表現し、訴えてきたこの機関誌の名前の持つ意味を考えると、今なおじゃりみちのごとく、その道のりは平坦ではないことは、今の現状を鑑みると自明の事であり、だからこそそのじゃりみちを一步一步踏み均していくこの復興への歩みは、地道でありながら、なお重要であることを感じさせられます。

今やKOB Eの状況、また東日本大震災の被災地の課題は年を追うごとに個別化していますが、俯瞰して全体の状況を把握する、という一方で、その個別化した課題の一つずつ耳を傾けていくということは、まさにこれまでさまざまな被災地で行われた「つぶやき」を集める、ということであり、舗装された道を車で通過するだけでは全く見えてこないものでもあります。

思い返してみると「じゃりみち」という名前は、そのことを最初の表明した一つの標語であるようにも感じています。

一人ひとり、いやたった一人にこだわるということは、まさに砂利として敷かれた石が、一歩踏み出した時に、一歩ごとに鳴らすその音のごとく、小さなつぶやきを聞くことに他なりません。

また、じゃりみちが舗装されていくのを要求する、待つ、ということだけでなく、じゃりみちだからこそその不便さを、人と人との知恵でどうカバーしていくのか、と

いう活動を通じて、人との縁が生まれ、その縁が次の創造力へと昇華していく、という場面がそこで生まれてきたということを考えると、一概に利便性だけを求めることだけがこれからの課題を解決していく糸口ではなく、その縁から生まれるものを、時にやせ我慢をしながら待ち続ける、そのことが大切のように感じます。

それは、KOB Eを端を発し、さまざまな被災地で活動をさせていただいて、今は佐賀県という、またこれまで縁のなかった地域に根を張ることになって、感じていることですが、これまで舗装されていた道のりが、今度は逆にじゃりみちと化していく、という状況が地方では起こりつつあるという実感を持っているからです。

「じゃりみち」とは綴られた歩みそのものであり、100号を過ぎたとて、これから歩みはこれまでと変わらず示唆に富み、縁あるものにとって貴重で重要なものであり続けることを期待しております。

海外の現場から



フィリピン台風30号 (Haiyan) 救援ニュース

CODE海外災害援助市民センターのフィリピン台風 (Haiyan) 被災地救援プロジェクトにご協力いただきありがとうございます。

2013年11月8日にフィリピン中部を襲った台風30号 (アジア名: Haiyan) により、死者6,201名、不明者1,785名、被災家屋110万戸、被災者は1,410万人に達しました (フィリピン国家災害リスク削減委員会、1月28日時点)。発災から4ヶ月を経た今も、多くの被災者は日々の生活すら困難な状況です。

CODEは発災3日後より、阪神・淡路大震災以降53回目の救援活動を開始し、この度、救援プロジェクトとして漁業支援を行うこととなりました。

「セブ島北部、バンタヤン島での漁業支援プロジェクト」

台風により多くの漁師はボートを失ったことで現金収入がほとんどなくなってしまいました。そのためボートの再購入も難しく、漁

業を再開できなくなっています。漁師にとって生計を立てる手段であり、また生きがいでもあった漁業を再開できるように、現地NGOネットワークとともに被災漁師にボートを提供します。

また漁に出る男性漁師の陰で、魚の売買、漁網作り、干物加工などで漁業を支える女性の役割にも注目しました。漁村の女性には現金収入の少なさ、女性の役割への認識不足、漁に出ることができない男性の女性への暴力など多くの

問題があります。女性は、経済的に自立することで漁業コミュニティ内での権利を向上し、女性ならではの潜在能力をはじめ、力を十分に発揮できるようになります。そのため、このプロジェクトでは、加工品製造などのより多くの収入を得ることができる仕事とともに創りだします。それが漁業コミュニティ全体のパワーアップにつながると確信できるからです。

今後、復興が進むにあたり、被災地では多くの支援が必要となります。引き続きのご協力よろしくお願いします。(CODE 上野智彦)



左：フィリピンで漁業に使用されるボート。モーター付のものもある。

まけないぞう 事業部より

まけないぞうに ついて考える会を 開きました

2月12日、神戸大学東北ボランティアバス（以下ボランティアバス）のメンバーとのミーティングを行いました。ボランティアバスは東日本大震災を機に発足した、神戸大学の学生による被災地支援グループです。年間5回の頻度で現地の仮設住宅に訪問し、まけないぞう作りを通したコミュニケーションなどを行っています。

ミーティングでは彼等との間に活発な意見交換がなされました。現状の課題を共有した後、これからの発展につなげるための案が幾つか出たのですが、広報の一環としてまけないぞうの絵本を作るというアイデアがあれば、一方で品質向上を目的とした具体的な指摘もあり、ミーティングは大きな成果を収めたといえるでしょう。

このように、まけないぞう事業は被災地NGO協働センターの事務局とともに、継続した被災地支援を実行する皆さまのお力添えによ

り成り立っています。広報、営業、その他に関してお気づきのことがあれば、広くご意見を承っていますので、お気軽にまけないぞう事業に関わってくださいませようをお願い致します。

ミーティングは月に1回の開催を予定していますので、その様子を随時お知らせ致します。（福岡 洗介）



■入会・カンパのお願い！

私たちの活動を継続するために、被災地NGO協働センターでは会員や活動資金のカンパを募集しています。詳しくはセンターまでお気軽にお問合せ下さい。

★団体会員	年会費¥ 10,000	×	1口以上
★個人会員	年会費¥ 3,000	×	1口以上
☆団体賛助会員	年会費¥ 10,000	×	1口以上
☆個人賛助会員	年会費¥ 3,000	×	1口以上
☆自由選択会員	年会費¥ 任意の額		

郵便振替 加入者名：被災地NGO協働センター
口座番号：01180-6-68556

■編集後記

こんにちは！じゃりみち101号を編集しました頼政です。最近じゃりみちの編集も少し慣れてきました。

さて、当センターおなじみの薪ストーブですが、燃やす薪が長すぎると不完全燃焼を起こしたくさん煙を出してしまいます。そのため、電動のマルノコを使って薪を短くする作業も良く私が担当しています。

だんだんこちらの作業も慣れてきて、木こりの練習になって

います。もしそういった作業にご興味があれば、是非一度ご連絡下さい(笑)



▲作業の様子

能登半島地震から7年を迎えて ～能登はやさしや土までも～

2014年3月25日で能登半島地震発災から8年目を迎ようとしています。能登の被災地の現状をとりあげ、地震から時間が経った被災地と、ボランティアの関わりについて考える会を開きます。一緒に参加してみませんか？

○タイムスケジュール

13時～ 受付
13時半～ 昨年の能登派遣の報告
休憩、アイスブレイク
14時半～ グループワーク
「地震から8年目を迎える能登とどのように関わっていくべきか？」

この会は能登中心の話にはなりますが、問題点、課題等は色々な被災地に通ずるところがあるはずで。ぜひご参加下さい。

日時：3月21日（金・祝）13時半～16時半
参加費：無料
定員：先着30名
会場：六甲道勤労センター5階 会議室E
（JR六甲道改札出て南すぐ、メイン六甲内）

申し込み先：KOBE足湯隊
参加をご希望される方は、氏名、所属団体等、連絡先を明記の上、足湯隊代表大坪(yuru.ky1011@gmail.com)までご連絡下さい。

ぞう 通信。

第52号

2014. 3. 11



発行所：被災地NGO協働センター 〒652-0801 神戸市兵庫区中道通2-1-10
TEL：078-574-0701 FAX：078-574-0702 <http://www.pure.ne.jp/~ngo>

東日本大震災から3年、これまで「まけないぞう」を通して、被災地を支えて頂き、ありがとうございます。3年の節目を迎え、被災者の人たちの口癖は「いつまで、ぞうさん続けるの？もう終わりかと思った。」、こちらは「まだまだ、やりますよ」と言うと、「じゃあ、よかった。」と笑みがこぼれます…。

～東日本大震災から3年、まけないぞうは続く～

東日本大震災の被害では、死者15,884名、行方不明者2,636名です（2014.2.10現在、警察庁まとめ）。犠牲になられた方へ心からご冥福をお祈りします。

「復興庁は26日、東日本大震災に伴う全国の避難者が2月13日時点で26万7,419人になったと発表した。災害公営住宅への入居などで、前回の1月16日時点の集計に比べ2,887人減った。（中略）避難先の自治体は全国47都道府県の1,175市区町村。居住していた県以外への避難者は、福島からが4万7,995人、宮城7,076人、岩手1,486人となった。」（2014/2/26産経新聞）

3年という月日が流れていますが、みなさん長かったような、短いようなという言葉が漏らしています。仮設の部屋で、復興住宅で、自力再建した家でそれぞれの場所でいまなお「まけないぞう」作りが行われています。先日千葉にお邪魔したときは、旭市の飯岡仮設の作り手さんが「ぞうさんがあって本当によかった。空いた時間ボーッとせずにぞうさんがあったから淋しくなかった。主人は津波に流され、一人ですが小さな家を建てたので、そこで暮らしていきます」と話してくれました。別の方は、「また何かお役に立てることがあればいつでもお手伝いします」と。春には復興住宅もできあがり、仮設も解消され、またあらたなステージの一步を歩き出します。

この千葉県では、今回は「コープみらいフェスタ きやっせ物産展2014」が開催され、昨年引き続き「まけないぞう」の販売をさせていただきました。会場には「まけないぞう」を応援してくれている「makenaizone」のメンバーのSさん親子が駆けつけてくれました。お嬢さんは大のまけないぞうファンでこの日もバッグにたくさんのぞうさんを忍ばせ、名前まで披露してくれました。そしてあらたに2頭購入して、仲間を増やしてくれました。そこへぞうさんの作り手さんが現れ、感激のご対面、緊張して十分にお話できなかったけれど、作り手さんには彼女の想いが確実につながったことでしょう。



被災地では、作り手さんが「私、ぞうさんの仲間さあ～はめられて（入れてもらって）よかったああ」と話しをしながら、遠野の松崎地区のつるしびなを見に行きました。そのつるしびなの素敵な魅力にほれぼれしていました。街中を散策し、遠野博物館も鑑賞し、みなさん「おらああ、70年生ぎでできで、こんなの始めてだああ」と感動することしきりでした。

家具屋さんのおひな様を見ながら家具を見ると、「今の仮設には、はいんねえ～、新しい家になってがらだ。いろいろもの買っても、津波に流された。だからあんま欲しくねえ」と…。

「毎日津波の話しをしない日はない。」、「仮設でもう3年も年取った。」「復興住宅はまだ、まあだだ。あと2年も3年もかかる。あの山まだなんもしてねえ～」

「まけないぞう」の作り手さんから頂いたお手紙を紹介します。

「2011年3月11日午後2時46分大きな地震があり、それが東日本、大きな津波となり、ただ逃げて生きて新しい春を迎え、今年で3年となり、月日とともに有志一同前に向かって歩き、絆が結ばれ、一本のタオルがまけないぞうさんになるなんて作れば作るほど可愛くて、全国やまた外国までもお嫁に行き、、、

“青いリボンはお父さんぞう、黄色いリボンはお母さんぞう、赤いリボンはお赤ちゃんぞう”きっと道林のぞうさんたちも大船渡のぞうさんにはまけないぞうと、道林の中を駆け巡ってるに違いありません。本当にありがとうございます。末永くよろしくお願い申し上げます。

後ノ入仮設住宅 有志一同」

「まけないぞう」を通して、被災者同士の絆がより強くなり、一人でもみんなと一緒に生きているという強さを感じました。

まだまだ被災者にとっては長く、大変な道のりが続くと思いますが、どうぞ今後とも「まけないぞう」をよろしくお願いします。

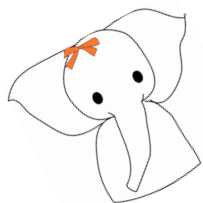
担当 増島 智子

～支援者からのメッセージ～

いつも“まけないぞう”をご購入させていただいております。福島県郡山市に住んでおります。東日本大震災での原発事故での放射能の影響で、一緒に住んでいた娘家族とは離れ離れとなってしまいました。様々な不安と悲しみの中、Facebookで“makenaizone”に巡りあい、どれだけ勇気づけられたか…。そこで“まけないぞう”の存在を知り、それを広めることで、まさしく“生きがい”を見つけたような気分になりました。現在、夫と共に自動車販売を営んでおり、納車の際のお客様の粗品と一緒にぞうさんをさしあげて、お客様に喜ばれております。少しでもお力になればとわずかですがタオルをお送り致します。センターの皆様におかれましては、本年もお体にご留意され、被災地の皆さんに“生きがい”を届けていただけるよう、お祈り申し上げます。



まけないぞう ￥400



遠野のつるしびな



～「まけないぞう」からのお知らせ～

東日本大震災より、「まけないぞう」を通して、被災地に心を寄せご支援頂いているみなさまに深く感謝申し上げます。被災地の復興はまだ目に見えるような形ではなかなか進んでいません。阪神・淡路大震災の時もそうでしたが、遅々として進まぬ復興に苛立ち、不安を募らせながら生活していることに、日々心を痛めています。

しかし、今回の東日本大震災では、取り返しのつかないような、原発の過酷事故を起こしてしまいました。土地、海、空にひろがった放射能はいまだ止まることも知らずに、私たちの生活を汚染し続けています。多くの人たちの命を奪い、生活を、人間関係を分断してしまいました。放射能は目にも見えない、臭いもない、感じることもできず、人間の五感をすり抜けてしまい、数年後にその影響がみられるのです。被災者や子どもをもつ親は日々目に見えない恐怖にさいなまれています。

この度、海外の支援者の方から「まけないぞう」の放射能測定などはしているのでしょうか？という極めて純粋で、単純な不安の声・疑問の声を頂きました。海外では福島第一原発の過酷事故後、日本のあらゆる製品（農作物も含めた）に対して不安の声があるのは事実です。前述したようになかなか見た目には感じることはできない放射能への漠然とした不安から心配の声が寄せられました。

以下にご説明するような手続きは本来もっと早くしておかなければならなかったことで深く自省しております。気づかせて頂きました方々には感謝して余りありません。

そこで、当センターでは青木クリニックの青木正美医師の監修のもと、「まけないぞう」の放射能測定を行い、安心・安全な「まけないぞう」を支援者のみなさまにお届けすることにしました。詳細についてはHPでご確認下さい。